様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３４６０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０４５１１

研究課題名（和文）植民地統治下台湾における「学校文化」の形成に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research on the structuring of school culture in colonial Taiwan

研究代表者
山本　和行（YAMAMOTO, KAZUYUKI）

天理大学・人間学部・准教授

研究者番号：００５８４７９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は台湾総督府の公文書、雑誌・新聞記事、学校史関連資料、回顧録・自叙伝・日記といった植民地統治期の史料の調査を実施し、植民地統治下の初等教育機関における学校儀式の開催、および各種教育機関による「芝山巌祭」への参加と祭典開催の状況について分析・検討をおこなった。
　以上の分析を通じて、学校教員や学校生徒の教育経験を構成するものとして、授業とは異なる経験としての学校行事を通じて形成される「学校文化」の存在に注目する必要があることを指摘し、天理台湾学会ほかで報告をおこない、論文投稿をおこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究を通じて得た知見によって、台湾で展開された植民地教育を通じて形成された個々の人々の教育経験が、当時の教育制度や教育内容といった一見して「わかりやすい」ものだけではなく、学校行事や「学校文化」といった人々の生活に根差した要素によって形成されたものであることがわかった。
　こうした具体的な教育経験が個々の人々のなかに蓄積されていることを知り、その内実についての知見を蓄積することによって、植民地教育および植民地統治をめぐる相互理解と対話の方法を具体的かつ現実的に構築することができ、現代社会における旧宗主国と旧植民地諸地域のあいだに存在する社会的分断を乗り越えることが期待される。

研究成果の概要（英文）：　Conducted field researches on historical materials, focused on colonial materials in Taiwan, including stasute books of the Government-General in Taiwan, papers and magazines, historical materials in school, memoirs, autobiography, and diary. perfomed analysis, using these materials, on the holding a school ceremony in the elementary school and the participation in the "Shizangan ceremony".
　Presentes research results at any conferences and publications, focused on the "school culture" that is important to the educational experience of many people under the colonial rule in Taiwan.

研究分野：社会科学　教育学　教育史

キーワード：学校文化　植民地教育　台湾　学校儀式　教員

１．研究開始当初の背景

過去に植民地統治を受けた地域において、植民地統治の経験は単に歴史的な事象であるばかりではなく、現在の社会や人々の意識を規定する、すぐれて現代的な課題でもある。グローバル化が進む現代社会においてもなお、植民地統治の経験を持つ地域と旧宗主国との関係性が温存され、植民地統治期に形成された社会階層や国境線を引き継ぐ形で国家形成がなされることによって、国際関係上、さまざまな政治的・経済的・社会的な格差や分断が生じている。

こうした植民地統治の経験は、旧宗主国の人々と植民地統治を受けた人々において、同じ経験が共有されているわけではない。たとえば、日本の中学・高校の歴史教科書においては、日本の植民地統治に関する記述がわずか数ページであるのに対し、台湾の中等教育における歴史教科書においては、全体のおよそ 3 分の 1 が日本による植民地統治に関する記述となっている。戦後 70 年が経過し、植民地統治下に生きた経験をした人々が年々少なくなっていく状況にあって、植民地統治の経験は、旧宗主国の人々にとっては「自国の歴史」として組み込んだり切り離したりすることが比較的容易である反面、植民地統治を受けた人々にとっては、「自国の歴史」から切り離すことのできない経験として位置づけられている。

学校教育を通じて醸成されるこうした旧宗主国と旧植民地地域とのあいだの植民地統治の経験をめぐる意識の分断状況を克服し、相互理解と対話の途を切り開き、国際関係における政治的・経済的・社会的な格差や分断を乗り越えていくことが求められている。

２．研究の目的

上述したように、学校教育を通じて醸成される植民地統治の経験をめぐる意識の分断状況は、近代的な学校が多くの人々にとって自らの思考形成の基盤となっていることを示している。学校で受けた経験を基に人々はその後の社会生活を営んでいくとともに、そうした人々で形成される地域社会が教育に対して様々な期待を寄せるなかで、学校に多様な役割が付与されていく。こうした教育をめぐる学校と社会の循環が人々の意識を規定する大きな要因となっているとすれば、学校という場に交錯する様々なヒト・モノ・コトの具体的な実相を明らかにすることにより、植民地統治をめぐる多様な意識がどのような思想的基盤によって規定されているのかについて理解することが可能になる。そのうえではじめて、植民地統治の経験を共有するための方向性を指し示すことができる。

以上の視点を踏まえ、これまでに研究成果として申請者が積み重ねてきた、植民地統治初期の台湾における植民地教育制度形成過程の解明、および学校儀式の具体的展開の実相を基に、日本統治期全体（1895-1945 年）を視野に入れ、学校関連行事を軸とした「学校文化」の形成過程を明らかにする。

具体的には、①初等教育機関（公学校、小学校、国民学校）における、祝祭日儀式や教育勅語の奉読式といった「学校儀式」の開催状況、②台湾教育会による「芝山巌祭」の開催と各学校の参加状況、という 2 点について検討することとした。

３．研究の方法

上述した目的を達成するため、以下のような方法で研究をおこなった。

①植民地統治下の台湾に設置されていた初等教育機関（公学校、小学校、国民学校）において、毎年開催されていた祝祭日儀式および勅語奉読式について、台湾各地の各学校での開催状況や各種学校儀式の開催に対する統治者と被統治者の位置づけを明らかにすることを目指した。これまで、台湾各地の初等教育機関で開催されていた各種学校儀式については、先に述べた「研究目的」中に挙げた教育文化史研究や学校史などにおいて個別的に論じられてきた。しかし、植民地統治下の教育政策における各種学校儀式の位置づけや儀式開催の全体的な動向などが検討されてこなかったため、総体として植民地教育における各種学校儀式の歴史的意味が解明されていない。以上の課題を克服するため、量的調査に重点を置いた研究計画を遂行した。具体的には、日本国内（国立公文書館）の台湾教育関係資料を収集・整理すると同時に、台湾の国史館台湾文献館所蔵の「台湾総督府公文類纂」所収の公文書から、教育政策における学校儀式の位置づけに関する資料を収集・整理した。また、植民地統治下に発行された新聞雑誌記事（『台湾教育会雑誌』、『台湾教育』、『台湾日日新報』、『台南新報』）から、台湾各地の各種学校儀式に関する記述を網羅的に収集・整理し、植民地統治下の台湾における各種学校儀式の全体的な開催状況について把握・分析をおこなった。

②各学校における学校行事のうち、学校内での各種行事に加えて、学校外でおこなわれた行事に注目した。その代表例として、台湾教育会が主催して毎年開催されていた「芝山巌祭」を取り上げ、祭典への各学校の参加状況について検討・分析をおこなった。「芝山巌祭」は 1896 年 1 月に発生した、武装蜂起による日本人学務官僚の「遭難戦死」事件（芝山巌事件）に対する慰霊を目的に始まった祭典である。この祭典は 1896 年の芝山巌事件発生直後から 1945 年 2 月まで、日本による植民地統治期を通じて開催されており、毎年の祭典開催に合わせて各学校生徒の集団参拝、燈籠の献納、祭典会場の清掃など、多くの学校が学校行事の一環としてこの祭典を位置づけていた。以上の点に注目し、本研究では祭典の実施状況と各学校の取り組みについて明らかにするため、植民地時期に発行された新聞雑誌記事を収集・整

理すると同時に、台湾の台湾省教育会所蔵資料を調査し、「芝山巌祭」の開催状況と祭典への学校動員の様態について検討・分析をおこなった。

４．研究成果

①台湾の植民地統治下における初等教育機関での学校儀式の開催に関する検討・分析については、著書論文を構成する重要なポイントのひとつとしてまとめた（本報告書５、図書①）。また、学会発表の形で公表した（本報告書５、学会発表②）。その概要は以下のとおりである。

a.台湾各地の学校でおこなわれていた学校儀式は、学校教員間の連絡をベースとして情報共有されながら実施されていた。その情報共有のベースとなっていたのは、教員・教育関係者による職能団体としての台湾教育会であった。台湾教育会は前身となる「国語研究会」から1901年に改組したタイミングで全島的組織として発足し、台湾各地の学校に赴任していた教員たちの組織化を進めた。地域的な差異をはらみながらも、各地の教員による組織化が進み、学校教育にかかわる情報共有のための基盤が形成された。

b.学校行事も含めた各種の教育情報を共有していた教員・教育関係者は、日本「内地」でもすでに一定の教育経験をもつ人々が多くを占めていた。そうした人々のあいだには、台湾各地の学校に赴任し、その地域で台湾教育会のような教員組織と地域の人々・地域社会との媒介役を担う人物もいた。そうした人物が新聞や雑誌に投稿した記事や手稿などを見ると、学校行事の開催にあたって、教員同士だけではなく地域の人々（日本人・台湾人・先住民）と協力もしくは動員する形で、地域社会とのコラボレーションのもとで学校行事を開催していた様子がうかがえた。

②台湾教育会が開催していた「芝山巌祭」の開催状況と、祭典への各学校の参加状況については、前者について論文の形で研究成果を公表した（本報告書５、雑誌論文①）。また、後者については学会発表を通じて公表した（本報告書５、学会発表①）。その概要は以下のとおりである。

a.いわゆる「六士先生」に代表される教員・教育関係者の殉職者を顕彰する祭典としての「芝山巌祭」が挙行されてきた台北・士林の芝山巌には、1930年に「神社同様の体裁」を帯びた施設である「芝山巌祠」が整備された。「芝山巌祠」は一般的には「芝山巌神社」と呼称されたが、制度上、正式な「神社」ではなかった。ただ、芝山巌という象徴的な場に「神社同様の体裁」をまとった施設が整備されるプロセスのなかで、植民地教育にかかわる人々の「拠りどころ」としての位置づけが施されることになっていった。そうした環境整備によって、学校教員だけではなく、学校生徒を動員し、定期的な参拝をおこなうという状況が生み出されることになった。

b.上記 a.に指摘した内容を踏まえ、1930 年の「芝山巌祠」設置以降の「芝山巌祭」の開催状況を検討すると、台北および台北近郊の初等教育機関および中等教育機関の教員・生徒の団体参拝が多くみられた。校種および地域によって団体参拝のありようには違いがみられたが、そうした違いはそのまま「芝山巌」に対する多様なイメージを担保する枠組みとなっていた。そうした多様な「芝山巌」とのかかわりによって、学校生徒（日本人・台湾人・先住民）のなかに多様な形で「芝山巌」をめぐるイメージが形成されていった。こうした経験のうえに、「芝山巌精神」という、一見すると空疎な言葉が内実をともなうように「想像／創造」されるようになっていったと指摘した。

以上の研究成果をまとめれば、本研究には以下のような意義があるといえる。

既往の研究においては、学校儀式の挙行が台湾各地の学校でそれぞれにおこなわれていた様子が列挙されて指摘されるにとどまり、台湾における植民地教育のなかでどのように位置づけられ、教員をはじめとする人々がどのようにかかわっていたのかを、総合的かつ具体的に捉える視点が不足していたといえる。

これに対して、本研究は台湾総督府の公文書や学校文書、および教員・教育関係者が雑誌・新聞に投稿執筆した記事を丹念に分析し、学校儀式を含む学校行事が公的な教育活動としてどのような位置づけがなされ、そうした活動を具体的にどのような人々が担っていたのかということを明らかにすることで、「学校文化」の形成という総体的な活動としてこうした動きを位置づけることができた。

以上の検討・分析を基に、こうした教育活動が学校単体・学校内部だけでおこなわれていたわけではなく、全島的な教員間のネットワーク（台湾教育会）を通じて多様な情報が共有され、そうした情報を基に学校での行事が展開されていたことが明らかになったと同時に、地域の人々（日本人・台湾人・先住民）とも情報共有もしくは連携し、学校でのさまざまな活動が展開されていたことが明らかとなった。そうしたなかで、教員や学校生徒だけではなく、地域の人々も含めた各種儀式への参加が推進されたことがわかった。

こうした理解から、いわゆる「植民地経験」と呼ばれるものが、学校教育における授業や良く知られた活動だけではなく、「学校文化」という教育生活・学習環境に根差したさまざまな動

きを通じて蓄積されてきたと理解することができる。こうした視点に基づき、本研究から、植民地をめぐる問題が単純に過去のものであるわけではなく、こうした具体的かつ個人的な教育経験の蓄積を基に現代を生きる旧宗主国・旧植民地地域の人々の意識が形成されていることを知ることができ、こうした人々のあいだの植民地に対する意識の断絶・分断を克服するための知見を提供しているといえるだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）
①山本和行、芝山岩を眺める／芝山岩から眺める―「台湾史」にどう向き合うか―、思想、査読無、第 1119 号、2017 年 6 月、7-23 頁

②山本和行、芝山巌の「神社」化―台湾教育会による整備事業を中心に―、日本の教育史学、査読有、第 59 集、2016 年 10 月、97-109 頁

〔学会発表〕（計２件）
①山本和行、植民地統治期における公学校教員の位置―教員の経歴に注目して―、天理台湾学会第 1 回台湾研究会、2019 年 3 月 23 日、台湾・東呉大学

②山本和行、1930 年代以降における芝山巌の位置―学校教育とのかかわりを中心に―、天理台湾学会第 28 回研究大会、2018 年 6 月 30 日、天理大学

〔図書〕（計２件）
①山本和行、伊沢修二と台湾、台湾・台湾大学出版中心、69-113 頁・371-407 頁・437-443 頁、2018 年 11 月

②山本和行、近・現代日本教育会史研究、不二出版、441-476 頁、2018 年 3 月

〔その他〕
ホームページ等
http://www.tenri-u.ac.jp/teachers/q3tncs0000000zq9.html

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。